

## 2015年度看護学部FD「質的統合法（KJ法）研修会」報告

上山 和子\*・古城 幸子

新見公立大学看護学部

(2016年11月30日受理)

本研究では、質的統合法（KJ法）研修における参加者の研究手法修得の認識と変化を把握し、FD活動の効果を明らかにする。方法は質問紙調査である。その結果、参加者の9割は充実していたと回答していた。自由記述では、32コード、5サブカテゴリー、【充実した研修】【研修をとおした今後の課題】の2カテゴリーが抽出された。質的研究法の体験により、研究方法の具体的な学びと研究方法修得に向けた課題が明らかになった。（キーワード）看護学部、FD、KJ法

### 1. はじめに

現在、看護研究の方法論としては、数値データを基に客観的、体系的プロセスを重視した量的研究と、主観的アプローチによる人間の反応を記述した質的研究に大きく分けられる<sup>1)</sup>。量的研究は、アンケート調査など調査研究として行われる研究方法論である。質的研究法は、人間の経験を詳細に記述し、理解を深かめるために用いられ、面接・インタビュー調査、参加観察があり、分析の代表的なものとして、グラウンデッドセオリー、エスノグラフィー、内容分析などがある。A大学においても質的研究の分析方法として内容分析法がよく用いられている。今回は、2015年度看護学部のファカルティ・デイベロップメント（以下、FDとする）として質的統合法（以下、KJ法とする）の研修会を企画した。KJ法の指導講師を迎えて2日間の研修である本研修の目的は、学部卒業研究および大学院生の研究指導における教員の研究指導能力の向上である。

本報告では、質的統合法（KJ法）研修における参加者の研究手法修得の認識と変化を把握し、FD活動の効果を明らかにする。

### II. 研究方法

1. 研究対象：A大学看護学部教員22人、A大学大学院生4人のFD研修会参加者計26人。
2. 研究方法および分析方法
  - 1) 2015年9月の2日間においてKJ法の講師による講義および演習での指導を受ける。
  - 2) KJ法の研修で用いるデータは、2014年度基礎ゼミナール履修の最終レポート記録を使用する。
  - 3) 研修効果について研修終了後に記述された参加者か

らのアンケート結果を分析する。

- 4) 倫理的配慮：学生のレポートの使用については、分析データのサンプルとして使用したものである。学生のレポート記録の使用については、A大学の倫理委員会の承認（承認番号：84）を受けて実施した。

### III. 看護学部FD活動の概要（図1）

1. 目的：2015年度看護学部研修会としてKJ法の講師を迎え、新たな研究方法の展開をとおして看護教育、地域医療の課題把握などを明らかにするための方法論を学ぶ機会とする。
2. 期日：2015年9月25日（金） 9：00～20：00  
26日（土） 9：00～18：00
3. 場所：A大学学術交流センター3階
4. 講師：看護質的統合法（KJ法）研究会顧問山浦晴男氏<sup>2)</sup>
5. 参加人数：9月25日：教員22名＋院生4名  
9月26日：教員19名＋院生3名

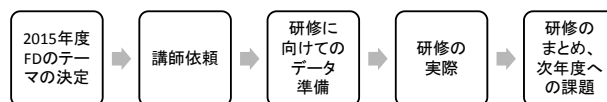


図1. 看護学部FDの流れ

### IV. 結果

26名の参加者から2名の分析担当者を除く24名の内、14名より回収した。回収率は、58.3%であった。

1. アンケート結果（図2）

FDへの参加後の充実度については、1名を除き参加して

\*連絡先：上山和子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

良かったと回答していた。

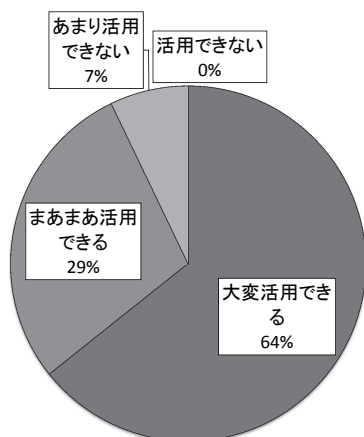


図2. 研修の参加者の充実度

## 2. 自由記述の内容

以下、【 】カテゴリー、「 」サブカテゴリー、< >コードで示す。

自由記述の内容は、32コード、「研修で学んだ内容」「研究方法の理解」「研修の活用方法」「研究方法の修得の困難さ」「今後の研修への課題」の5サブカテゴリー、「充実した研修」「研修をとおした今後の課題」の2カテゴリーが抽出された(表1)。

### 1) 【充実した研修】

「研修で学んだ内容」では、<2日間は大変だったけど、とても充実していた><今回、根拠を持ち学べたのでその効果を実感した>など指導講師を迎え、具体的な指導を受け、充実した研修として挙げられていた。

「研究方法の理解」では、<この研修方法に慣れていく

ことが大切である><今後、研修を深め、さらに理解したい><初めてKJ法に触れて、少し質的研究が理解できた>など体験的に学べ、研究方法の理解が深まったことを挙げていた。

「研修の活用方法」では、<実習のまとめに活用していきたい><授業やゼミに活用していきたい>など具体的な活用方法を挙げていた。

### 2) 【研修をとおした今後の課題】

「研究方法の修得の困難さ」では、<自分自身のスキルとしてはまだ十分でない><短時間の中で分類していくのが難しかった>など研究方法の修得に向けて困難さを挙げていた。

「今後の研修への課題」では、<すぐに活用できないがきっかけをつかみたい><忘れないうちにトレーニングをつみたい>など今後の課題を挙げていた。

## V. 考察

2015年度のFDとしてKJ法の指導講師を迎えて2日間の研修を実施した。以前に学修体験がある人、今回初めて体験する人と経験は様々であった。体験的に学修する過程は、教員も院生も充実していたとの感想であった。

実際のデータを使用し分析していく過程は、<初めてKJ法に触れて、少し質的研究が理解できた>などの「研究方法の理解」が深まり、演習の段階ごとに講師から一人ひとりに対するアドバイスを受けることで、具体的に分析スキルを修得していく機会になったと考える。

今回、使用したデータは、初年次教育で提出されたレポート記録を研修用に加工して準備し、分析した。そのため、学生の教育効果等の分析において、今後の指導に活用できる学びが得られたと考える。看護基礎教育課程では、学生

表1. 参加者の自由記述

カテゴリー	サブカテゴリー	主な内容
充実した研修	研修で学んだ内容	・2日間、大変だったけど充実していた。 ・今回、根拠をもち学べたことでその効果を感じた。 ・直接指導していただけて良かった。
	研究方法の理解	・この研究を通して分析時の自分の傾向を再確認できた。 ・初めてkj法の研修に触れ、質的研究のことを理解できた。 ・きちんとした方法は初めて学んだ
	研修の活用方法	・現場での意見をまとめるのに使っていきたい。 ・今後の質的研究方法に使っていきたい。 ・授業やゼミに使っていきたい。
研修をとおした今後の課題	研究方法の修得の困難さ	・自分自身のスキルとしてはまだ十分でない ・短時間の中で先入観に捉われず分類していくことは難しかった。 ・個人で実施するより、複数で行う場合ではイメージがちがう。
	今後の研修への課題	・忘れないうちにトレーニングを続けたい。 ・すぐに活用できないがきっかけをつかみたい。 ・時間の確保・技術が自己の課題である。

の学びを分析していく過程として記録物の分析から行われることが多い。分析過程では、知識の確認だけでなく、学びの内容や学修の困難さ等を把握することが必要である。この分析手法を用いることで、学修プロセスから教育方法や指導方法の振り返りができ、学生がどの部分でつまづいているのか具体的に知る機会となり、授業改善にも繋がる。今回のFDでも実習での学びや、授業に活用したいなど今後の教育方法への活用が期待され、研修としては効果的であった。

また、大学院生では、自身の研究手法への活用と同時に、社会人学生が臨床の現場での活用の可能性を実感したことは、臨床に根差した研究を進めていく上でも有効であったと考える。

一方、分析過程では、ひと通り手順を踏んで進めていったが、ラベルの迷いなど回数を積み重ねて分析の精度を上げていくことも必要である。さらに分析過程では、そのデータが意味するものを追及していく基盤も求められる。

このため、今後の課題で取り上げられていたように、実際のデータを用いながら分析を繰り返していくことと、必要なアドバイスを受けながら研究を進める研修体制の充実を図る必要がある。研修中は、研修メンバー同士の意見交換の場になり、お互いがアドバイスを行える関係づくりとしても体験的に学ぶ研修は有効であった。

また、KJ法の修得により、新たな研究方法の展開を通して看護教育、地域医療の課題把握など幅広く活用でき、問題解決への取り組みの一助になると期待される。

今後の課題として引き続き研修を継続し、研究方法の質の向上に繋がる研修体制を整えていきたい。

## 謝辞

FDの指導講師及びアンケート調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) ナンシーバーンズ・スーザン・k・グローブ著、黒田裕子・中木高夫・逸見功監訳：バーンズ&グローブ看護研究入門第7版.エンゼビア・ジャパン, 2-66, 2015.
- 2) 山浦晴男：質的統合入門法考え方と手順. 医学書院, 2012.